

星野浩子さん(日中)が最優秀賞

「交通安全は家庭から」の 作文コンクールに三人が入選

残された家族の悲しみを考えて

日光中学校三年 星野浩子



星野浩子さん

ちょうど二年前になるだろうか。あの時の事故を思い出すたび、私は人命の尊さ、そして交通事故の恐ろしさを、改めて強く感じるのである。

私が中学一年の夏、土曜日の午後だった。部活が早く終わったため、三時半ごろ帰宅した私は、自宅の戸を開けようとしてふと立ち止まった。隣の家の様子がどうもおかしい。隣りに住んでいるのは、まだ引越してきて間もない家族で、夫婦と三人の子供がいる。日も浅いせい、近所では目立たぬ存在で静かなお宅だ。なのにその日は、人が集まっているにざわついている。「何かあったのだろうか……」。私は不安な気持ちで、玄関の戸を開けた。「ただいま」返事がない。やはり、我が家もいつもと違っていた。母はいるのに私が帰ってきたことに気づかぬ様子で、何やら忙しそうに部屋を駆け回っている。

「何かあったの」私が聞くと、「隣の奥さんが交通事故を起こして、たつた今亡くなったんだよ」

私は信じられなくて、ただぼうぜんとするだけだった。自分の部屋に入ると、全身の力が抜けたように座りこんでしまった。母の話によると末の子は三歳で、お母さんが亡くな

ったこともわからない様子で、「お母ちゃんお客さんだよ。早く起きてよ」と言っっては、集まった人達の涙を誘っていたという。聞いているうちに、涙が私のほおを何度も何度も伝った。

亡くなったおばさんのちょっとした運転ミスで自分を死に追いやってしまい、家族の人達を悲しみのどん底へ突き落してしまったのである。

この出来事があつて以来、私の交通事故に対する考えは、以前よりも真剣なものになった。事故を起こす一番大きな原因は、人間の心の中に生じるちょっとした油断だと思う。今までの交通事故の中でも、多く見られることではなからうか。

交通安全は家庭から

和泉加藤紀子



加藤紀子さん

その朝も、おなかいっぱい食事をとると、我が家の子供達は、

「いってまいります」

「右に同じ」

「おなじく」

「命とは、自分のものであつて自分だけのものではない」亡くなったおばさんは、三人の子供達にとって大切なお母さん。ご主人にとつては大切な妻。そして、何人もの人達から必要とされていたに違いない。それが、あつたという間にこの世を去ってしまった。交通事故という恐ろしい事故のためにである。亡くなったおばさんは、朝早くから働きずめで、年中疲労が重なっていたということだ。やはり、規則正しい生活の中から、車を運転する資格が得られるのだと思う。

人間は、自分達が発明し、発展させてきた自動車に振り回されてはならないと思う。車を真剣に見つめ、上手に利用することによって、次第に事故も少なくなるのではないだろうか。残された家族の悲しみを考え、このような事故を一件でも少なくするよう、私達一人一人が努力を続けていくことが大切だと思

「気をつけていくんだよ。いつてらつしやい」私の声など聞えているのかいらないのか元氣いっぱい出かけていきます。毎朝それでも、必ずその一言を添えて送り出すのです。秋の日は短かく、もう五時になる前には、夕食の仕度始める私を電話のベルが呼んだ。あわててガスを止めると、

「あの正裕君が事故なんです。歯がとれたので、今市の何々さん宅にいます」と相手は告げた。あんなに元氣で、今市の耳鼻科に自転車を出かけていった二男のことだった。私は下の子に急を告げ、あわただしくハンドルを握ると、言われた家に行った。唇をほらし

栃木県、栃木県教育委員会など七団体では、交通安全思想の高揚と交通事故防止の自覚と実践をすすめるため、「交通安全は家庭から」と題し、県民から作文を募集しました。この中から、一般の部で和泉の加藤紀子さんが優秀賞、中学校の部で日光中学校三年の星野浩子さんが最優秀賞、小学校の部で所野小学校六年の宮川香さんが入選しました。